

---

# 慈 恵

---



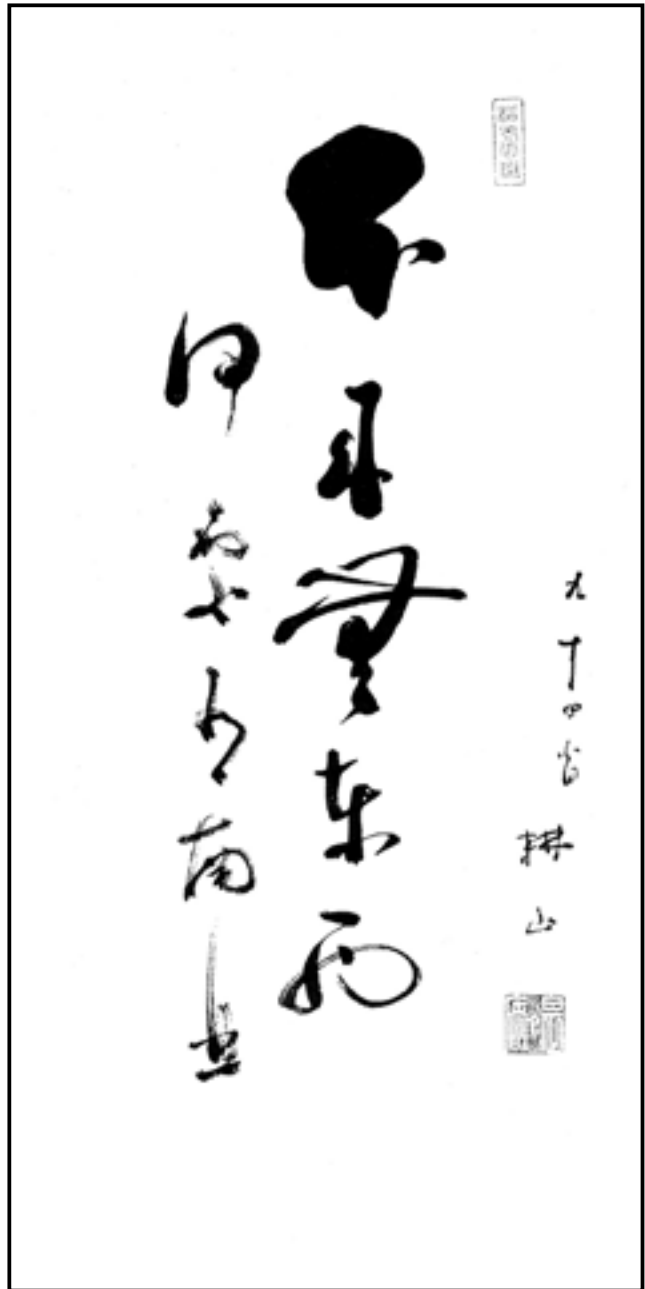
---

平成27年 秋季号

---

No.52

宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園



本来東西無し

何<sup>いずれ</sup>の處にか南北有らん

九十四翁 耕山

「本来無東西」を、紙面のほぼ真中に書し「何處有南北」をやや小さめに渴筆で書いた。よって右側が空いたので、「九十四翁 耕山」をそこに入れ、バランスを保った、清澄な二行書。まっ白な紙面に、温潤玉のごとき墨気が深く冴えわたり、限りなく美しい。

老師の禅風は、三生軒ゆずりの剛柔さと、香夢室伝来の綿密さと兼ね備えると言われるが、前の二行書を剛柔とすれば、これには綿密さがよく表現されていよう。九十四歳の作。

「禅画報」より

# 種痘法を伝える

一七九六年五月十四日、イギリスのエドワード・ジェンナーは、牛痘にかかったサライ・ゴルメスという乳しぼりの女性の腕から採った漿液を、長子のジェームス・フィップスの腕にうえつけた。これが西洋の種痘の始まりである。

ところで、中国では明の戴曼公という人をもって、種痘の始祖とされている。

曼公は若いころ、ある県の地方官をつとめていた。その時、天然痘にかかって多くの人が亡くなっていくのを見て、非常に心を痛めた。何とか救ってやれないものかと思つて、いろいろと工夫を重ねて、ついに一種の種痘法を発明した。天然痘のかさぶたを粉末にして、それを鼻孔に吹き入れるという方法である。効き目が非常によかったため、曼公は多くの人がびとにこの方法を施した。

実は、天然痘予防に心をくいだいたこの曼公こそ、承応二年、日本に帰化した黄檗宗の独立性易である。

独立はもともと医術に長じており、来朝してからも、薬を調査しては病人に分け与えていた。また、この種痘法も日本に伝え、肥前あたりにはその方法を伝える医師が多かった。

「禅門逸話集成」より

## 独立性易どくりゆうしやうえき (二五九六〜一六七二)

黄檗宗、中国杭州に生まる。明国が滅び清国となった戦乱に際し、東航し長崎に上陸した。五十七歳の時である。長崎奉行の橘正述に請われて、長崎にいたが、折しも来朝した隠元の法さかんなるを見て、隠元の下に投じて出家した。詩文から医術にまで通じていた。

# 秋 じよみ

| 11 月  | 10 月  | 9 月  | 当山行事  |
|---|---|--|---|
| ●立 <small>りつ</small> 冬 <small>とう</small> や 冷たき柿を掌にしたる(滝 春一)<br>11 / 8 立 <small>りつ</small> 冬 <small>とう</small><br>●小雪 <small>こせつ</small> や 古りしたれる糸 <small>いと</small> 桜 <small>さくら</small> (飯田蛇笏) | ●暦 <small>れき</small> はや 寒露 <small>かんろう</small> の蘭の花の濃し(三田青里)<br>10 / 8 寒 <small>かん</small> 露 <small>ろう</small><br>●霜降 <small>そうこう</small> や 羽ふるひやまぬ水の鶴 <small>つる</small> (北谷 生) | ●蜘蛛 <small>くまじら</small> の困 <small>こま</small> の穂草 <small>ほくさ</small> をつづる白露 <small>はくろ</small> かな(順蘭)<br>9 / 8 白 <small>はく</small> 露 <small>ろう</small><br>●秋分 <small>しゅうぶん</small> や もみづりはやき岩蓮華 <small>いんれんげ</small> (那須弥生) | 彼岸会<br>9 / 20 入り<br>9 / 23 中日 <small>あきのみち</small><br>9 / 26 明け |
| 11 / 23 小 <small>しょう</small> 雪 <small>せつ</small><br>11 / 3 文化の日<br>11 / 15 祝 <small>しゆい</small> い 七五三の日   | 10 / 12 体育の日<br>10 / 25 十三夜 <small>(後の月)</small>  | 9 / 21 敬老の日<br>9 / 27 十五夜 <small>(中秋の名月)</small><br>9 / 9 重陽 <small>ちゆうやう</small> の節句 <small>(菊の節句)</small>  | 祝日等   |

「じよみ事典」東京美術 参考



## 一代目純くん

## 遠藤ランディーくん

## 二代目ジュンくん

## 匿名

或る日、妻は新聞の地方版を持って私に「ワンちゃん見に行こうか」小旅行たまにはいいかと神奈川の秦野中井まで出かけました。私は観るだけと考えていました。着いてみると地元特産品販売店の様な印象でした。受付が有り、係の人の説明を聞く事に。「普通は犬種等予約して誕生したら連絡を受け購入の運び」との事。「そうなんですか」。確かに色々なワンちゃんを揃えておくのは私も嫌です。受付を出て緩やかな裾野に手前から若い犬奥に行くに従い年老いた犬。大切にしている事が解りました。渡り板を登りきり細長い犬舎にワンちゃん達がいました。この子ならと思ふ事も無く受付に戻りました。「今

日来た子が居ます。ミニチュア・ダックスフンドです。親はチャンピオン犬でシツカリしています。只オオカミ爪が有りまして」(後にオオカミ爪と言うのは足首に一つ多く指が有り、それに爪が有ると知りました。車にはチャッカリ富士ビタイ顔の片手に納まる位の小さな体が妻のお尻と背もたれの間に居ました。顔を見て・・・もう僕はここに帰る事は無いね・・・)ランディー“と命名。前のワンチャンは「秋田犬、踏んでしまいそうです。或る雨の日、ランディーと私、吐き出し口から並んで四つん這いで庭を見て「生まれた処はこんな匂いだった」と思い出してもいる様です。妻は「男の背中二つだね・・・ふふっ」ワンちゃんが来てから初めて喧嘩をした時、あいだに入り「喧嘩しないで」の様でした。次の喧嘩の時は「聞きたくない」でした。一年位経ち「ワンちゃん見に行こう」とまたも妻の誘いです。「今度は飼おうなんて言うなよ」帰りがけ「お茶でも飲んで行かない？コーギーって言うんだけど欲しいな」「お金無いよ」「郵便局の通帳持ってきた」

と命名しました。ランディー君はイケメン、結婚相手は引つ張り尻です。ジュンはコアラの様な毛色ワンちゃん達は立ツチを覚えましたがジュン君の方は体が重くなりいつの日か忘れたみたいです。車で多摩湖へ。皆の居る広場で妻を追うような仕ぐさでランディー立ツチ、見ていた人は「チョー可愛い」他の人はジュンに「おれこの子がいい」でした。日常ランディー君は小さい体で凛々しくも尻尾をピンと上げ競いながらひた走り雪の降る日も片道三十分からの散歩、ジュンの誕生はランディーよりも半年遅く五年早くに他界しました。

二〇〇七年(平成十九年)十一月二十六日、「ランディーはジュンが来なかつたら我儘だったかもね」今思えば「チョットだけコーギーじゃないかもね。うちで飼わなかつたらどうなつたかね」等々。胃腸が弱く体重が重かつたので足の故障が多く靴をはかせて散歩したり最後の方では無理に走らせ関節が腫れてしまいました。終りに癌が肺に広がり、レントゲンにフジツボの様な白い影が広がり酸素室

一カ月位は淡々と寝てたり居間に出たりして居ました。日曜サッカー観戦で留守にしました。次の日仕事して昼食「早飯するよ」、自宅に戻り食事待ちをしていた時、ジュンはケイレンが始まり心臓マッサージをしました。が最期でした。「私を待っていたのかな？」出棺の時にはトカゲと小さな虫が壁に並んでいました。お供の様でした。ジュン君の分まで生きてねと言っていた「ランディー」くん、十七歳、平成二十四年二月八日他界。男の背中、男同士、もう少しベツタリとしてあげれば良かったね。逝く時、私と家内の間で息を引き取りました。もう一つ初代「純」が居ました獣医さんの所で朝方息を引き取りました。あえてもう一つの・・・と加えましたが三匹居た事で教わった事が有ります。どれも私と家内の思い出です、そしてこの先も思い出が出来るでしょう。

最近、新しいかわいい家族が加わりました。ムク「君です。ランディー」君から一年経つてます。